

2011年（平成23年）3月のワンポイントレッスン

崇武館  
館長 飛鳥宗一郎

## 東日本大震災にお見舞い

3月11日に発生した東日本大震災で罹災されました皆様に、心からお見舞い申し上げますとともに、不幸にして落命された方々にお悔み申し上げます。衷心よりご冥福をお祈りいたします。

復興に至るまで、悲しみと苦しみの中で長い年月を過ごされることと思いますが、気丈に頑張られますよう祈念いたすばかりであります。

## 私の大火と敗戦の体験

はじめに

忘れもしない3月11日午後2時46分、私は市内七日町通り大沼デパートの前で地震に遭遇した。舗装道路がひび割れするのではと思うほど波打って揺れ、道路標識や街灯など軋みながら先端部を回転させており、間もなく停電し信号も一斉に消えた。あの日誰もが体験した出来事である。

携帯電話を持参しなかったので家族と連絡の取りようがなく、宮城県沖大地震ではないとされた二日前の地震のことを思い出しながら、その時点では千年か千五百年に一度あるかないかという巨大地震だったとは夢想だにしなかった。

ほどなく市立病院済生館裏でバスに乗ろうとしたところ、運転士は停止指令が出て運行できないという。それでは山交ビルにまで行けばと歩いたがタクシーはなく、駅なら間違いあるまいと積もる雪を払いのけながら到着すれば、タクシー待ちの人が長蛇の列。1時間待つてやっと順番がきた。車内の温りにほっとするが、ラジオは震源が宮城県沖でマグニチュード8.8の巨大地震だと伝えており、帰宅は4時20分であった。

既に孫たちは学校から帰宅しており、小学校の生徒に対し注意を呼び掛けるスピーカー付きの自動車が触れ回っていた。

丁度、97歳の母も3月1日から同居しており、5時過ぎには長男夫婦が帰宅して家族全員顔を合わせ、先ずラジオを出して情報を聞けば、地震発生後30分もしないうち

に三陸海岸を始め列島沿岸に大津波が繰り返し襲来し、陸前高田市など市街地や沿岸の集落は壊滅状態、犠牲者の数は把握しきれないとのことである。

次男家族を始め多くの友人知人が被災地を拠点としているため、携帯と固定電話を掛けまくるが何処にも繋がらない。

我が家は、水道は出るが電気は依然として消えたまま、この分では今夜中の復旧は無理と判断し、暗くなる前にとローソクと蠟台を取り出し、近所のコンビニに行けば駐車場は自動車でごった返し、中は非常灯で営業しレジも動いている。瞬く間に棚から消える食品類に急ぎ店員が補充していたので、カップラーメンを大量に買い込んで帰る。これを今夜の夕食にするつもりである。

暗く寒い中にローソクの灯り、家族全員が1階に寝ることで一体感は増す。長男の携帯メールに次男夫婦の無事が入り確認できたが、他の縁者や友人の安否は確認できないまま、要所にローソクを置きラジオ付けっ放しで一夜を明かす。

翌日になり状況は明確になり、更に拡大する被害報道に驚かされる。加えて福島第一原子力発電所の異常事態発生である。爆発音とともに目に見えない放射能汚染が限りなく広がり、住民の強制避難命令が出たという。

私は今回、どうしても空手道ワンポイントレッスンを書く気持ちになれない。住む家も財産もなくした被災者の心情を思い、亡くなられた人々への鎮魂の気持ちを込めて、この度の大災害とは比較できないささやかな罹災体験と、最近とみに忘れがちになってきた終戦前後のことなど、今まで一度も記録に留めていなかったのを記憶を辿り記すことにした。

なお、「大東亜戦争」の呼称は、開戦直後の12月12日の閣議により決定された。終戦後の12月、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）により一方的に「太平洋戦争」と置き換えられたが、現在の日本政府は両者ともに定義して用いる用語として存在させていない。第二次世界大戦とする呼び方も汎用されるが、それならドイツ、イタリアのヨーロッパ戦線も含むことになり、今回の記述と必ずしも適言し難いため、「大東亜戦争」を用いる。該当年の表記については、私の時系列イメージから元号の方が辿り易いため、西暦と併記して用いる。

## 参考事項

- ・ 昭和10年(1935)11月4日(水)、山形県最上郡東小国村向町にて筆者出生
- ・ 昭和16年(1941)12月8日(月)、大東亜戦争(第二次世界大戦)の開戦
- ・ 昭和17年(1942)4月17日(金)、向町大火発生
- ・ 昭和20年(1945)8月15日(水)、大東亜戦争敗戦による終結

## 1 大東亜戦争開戦前後と国民学校入学まで

- ☆ 乃木希典將軍我が家に泊まる ☆ 横綱・双葉山 70 連勝ならず
- ☆ 大東亜戦争の宣戦布告

私にとっては、この開戦と4か月後の向町大火は幼少時最大の出来事であったため、70年近い歳月が経過しても鮮明に記憶に残っているのだと思う。

その中から、断片的になるが思いが強かったところを抜き出してみる。

- 商家を兼ねた住居としては向町集落で最大級の茅葺家屋で、庭を一望できる客間（「中門」と呼んでいた）を挟んで郵便局が建っていて、廊下で行き来できるようになっていた。
- 中門には「陸軍中将乃木希典この家に泊まる」の掛軸があって、この書は本人でなく副官の手によるものと聞いた。この時、乃木將軍は仙台市に本拠を置く第2師団長で、我が家で宿泊した翌朝、「台湾総督」に発令する電報を受け、直ちに仙台市に引き返したと聞いたので、我が家に泊られたのは明治29年（1896）10月13日から14日朝にかけてだったことになる。勿論、私どころか父さえ生まれる前のことである。



乃木希典陸軍大将

脚注：乃木希典(1849～1912)は第59代宇田の末裔で、長州（山口県）の人。西南戦争、日清戦争、日露戦争など従軍し、特に日露戦争では第三軍司令官として旅順攻略を果たす武功に輝く陸軍大将で、この戦争で長男、次男が戦死している。日露戦争後は明治天皇の思召により学習院長に任じられた。明治45年（1912）7月に明治天皇が崩御され、9月13日の御大葬から戻ると静子夫人ともども殉死し、後に明治期武士道終焉の人と言われた。

- 昭和4年1月場所4日目、横綱・双葉山が70連勝ならずして敗戦し、このラジオ放送を聴いた記憶がある。3歳2か月の時であり多分これが私にとって最古の記憶であろう。NHK和田アナウンサーの『双葉敗れる』の張り裂けるような連呼が今も耳に残っている。後に何度も繰り返し語られ、叔父とその場面を想像しながら相撲を取ったために残った記憶だと思う。



名寄岩 双葉山 羽黒山

- 雪囲いにすっぽりと包まれた冬は、時折、七輪「網渡し」の上で鰯（はたはた）の焼ける香ばしさが家中に満ちて籠り、たまらなく食欲がそそられた。鰯が今でも大好物となっている基因か。
- 手洗いは庭後方の野外にあって、渡り廊下でつながっていたが冬は寒くて大変だった。だが、概して当時の人たちは寒さに対し体を順応させ苦しなかった。
- 二階建て土蔵の茅葺屋根の天辺から大きな鳥が頻繁に出入りするので、たまたま掛っていた梯子登って覗いたところ、青白い卵が数個あった。『宗一郎が蔵の屋根にいる。誰か降ろしてこい』と叫ぶ祖父の声で、やっと自分が高みにいることに気が付き、足が竦んだ。作業中の人から抱えられ地上に降りることができた。
- 家族は曾祖父母、祖父母、両親、独身の叔父（開戦直後、浦賀市の造船所に徴用された）と私の8人のほか下働きの女中がいて、家業は呉服商であった。
- 曾祖父は山形県郵便局長会長を務めた後に引退し、中風を患い納戸に居て、寒い日は火鉢にかざした掌で私の手を温め、『飛鳥家存亡の危機に瀕した時、総本家としてお前が立ち上がるようこの名を付けた』と名付け由来など語ってくれた。今に至るまで全然役に立っていない自分を恥ずかしく思う。
- 同じ集落内に数軒の分家があった。
- 歩兵第32連隊（明治37年、連隊本部を秋田市から山形霞城城址に転営した）の軍旗手を務めた経験を持つ祖父は村役場の助役で、他に「帝国在郷軍人会」（明治43年発足の予備役軍人による全国組織）の最上郡（現在の新庄市を含む）分会長を務め、戦前戦中の士気高揚に郡内を駆け回っていた。
- 父は24歳で曾祖父から向町郵便局長を引継いだ。旧制山形商業学校の柔道部員で、帰郷後は素人相撲（田舎相撲）を取り、幣束（青竹に紙の垂しを下げた神祭用具の一つで、今でいえば優勝トロフィーに当たる）を持ち帰るのを自慢とし、座敷長押の上に掛けて飾っていた。2部屋の長押に防備用の槍が掛っていた。
- 大阪府警察官をしていた叔父力雄のところ、その妹の叔母智恵子が寄宿し短大で学んでいた。小学校入学前年の8月末、夏休みが終わった智恵子を送って祖母とともに大阪まで行った。北陸線に乗って初めて海を見た。着けば、日本第2の大都会に圧倒され、あちこちと見物させられる中で阪急デパートでのこと。エレベーターやエスカレータに驚き、買い物中に間違ってて智恵子と同じオレンジ色の着物を着た婦人の後について行き、気付いたら迷子になっていた。右往左往して必死に駆け回って探すけどどうしても出会えない。やや時間が過ぎて店員から、『何処から来やはったの』、『名前はなんていうねん』と問い掛けられて、必死に返答するが全く言葉が通じない。『6歳くらいの迷子さんがいます』の場内放送で何とか一緒になることできた。

○ 開戦を前にした秋先、政府の指導で「部落会」の下に「隣組」が組織され、総決起集会のような催しが我が家を会場に26世帯が集まり、主婦たちが一日掛りでご馳走を作り夕刻から宴席になった。子どもたちを含む総出の集合で、大人たちは酔うほどに歌や踊りも出て賑やかなものだった。

○ 12月8日(月)朝、アメリカ、イギリス及び中華民国に対し宣戦布告する開戦のラジオ放送を聴いた。大人たちの『いよいよ戦争が始まった』『勝つまで戦い抜くぞ』のような叫びと、真珠湾奇襲攻撃の戦果に『やったぞ、万歳』の声に満ちていた。寒々とした朝で、その時私は綿入れの着物を着ていた。



真珠湾奇襲攻撃

○ 年が明けて、シンガポール陥落(昭和17.2.15)大勝利を祝った「提灯行列」があった。沿道には日章旗を振る人たちが並びたち、「日の丸提灯」の他に大きな行燈にスローガンが書かれ、大勢の人たちが作る列は裏小路まで雪道を練り歩いていた。3月半ばころだったように思う。

## 2 小学校入学と向町大火

入学の1カ月ほど前に面接があつて、昭和17年4月7日(火)私は残雪の残る中、自宅から300mほどの東小国村立向町国民学校(昭和16年、尋常小学校から改められた)に入学した。ランドセルを背負っていたがズック布と合成皮革で作られていた。それでもランドセルを持つ子供は5分の一にも満たず、他は下げカバンか手製の布袋であった。入学した次の日から、「独り息子」で育った私の空威張りは、大勢の兄弟と一緒に逞しく育った同級生たち前では通用しないことを思い知らされた。

通学して10日を過ぎた17日のこと、新入生が下校のため担任の先生と一緒に昇降口に着いた午前10時30分、若くて長身の男性先生が『火事だ。大火事になるぞ、1年生を帰すな』と叫び立ちはだかった。その日は旧暦の3月節句前で、晴れてはいたが春先の乾燥した西風が強く、グラウンドには砂埃が舞っていた。火事と聞くと途単に心臓が高鳴り、担任の先生から『近くの子と手を離さないで』と言われて引率され、田圃道伝い屋並みと反対側の鎮守の神が祀られている愛宕山の裾に避難し、誰もが我が家の方へと視線を向けたはずだが、右手風上に見えた火の手は炎と煙は強く傾斜しながら流れて走って燃え広がり、それは瞬時の出来事のように思えた。田圃の半分は田起こしされていたが水は入っていない。その中を全校生徒と先生方が続々と走り来るのが見えた。

暫しのうちに、学校からも煙が噴き出したため、山裾だけでは危険となり奥まった

杉の若木が茂る方へと人波は移動する。私は下駄の鼻緒が切れたので、手に両方の下駄をぶら下げ、足袋裸足で先生に従った。

どの位時間が過ぎたのか分からないが、児童生徒たちのところに家族が集まり始めた。私の母も駆け付けてきて先生から私を引き取り、火の及ばない風上の田圃道を伝い集落を遠回りして歩いた。『おれの家も焼けたか』と問い、母は『んだ』。『おじんちゃん』と中風の曾祖父を気遣うと、『郵便局の人が背負って逃げた』。ただそれだけの会話で下駄を下げ火照りを避け、手を引かれ黙々と歩いた。

途中で、お寺の本堂が火達磨となって燃え盛り、学校は既に跡方もなく炭小屋だけが真っ赤な丘のようになって炎を吹き上げ、離れたところでは防火服に身を固めた消防士が忙しなくポンプのホースを引いて動き回っていた。村の人たちではなく、他所から来た応援の消防隊だろうと思った。

母に連れられて行った先は、学校と反対側で我が家の裏手に近い陸羽東線羽前向町駅であった。未だ燃え盛る火の海を目の当たりにして、父と祖父と対面し『助かってよかったな』に、『ん』と。ただ茫然として顔を見合わせるばかりであった。

駅前の小さな広場には、大勢の人が顔中を煤で真っ黒にして、家族を気遣い未だ会えない人、無事を確認できない人の情報交換などをしながら、今後の行く末を嘆いていた。その時、火災は絹出川の100メートル以上もある橋を渡り、本城集落の十日町全部を焼いていると初めて聞いた。

父とともに我が家の方向に目を向ければ、母屋も土蔵も跡形もなかったが、隣家の土蔵だけ白壁が真っ赤になって立っており、程なく中心部目掛けて崩れ落ち狂気のような火柱が立ち昇った。

小さい頃から、火災に遭っても土蔵だけは残ると聞かされていた。父は火事発生と聞くと衣類など蔵に投げ込んでから全部の扉を閉め、蔵は残ると信じていたという。家から持ち出した物といえば仏壇から釈迦像と位牌を風呂敷に入れて、祖母が背負い出したのが唯一となった。

乾燥した強風に煽られた火勢は想像を絶する猛烈さで、学校の他に村役場、郵便局、駐在所、営林署などことごとく焼失させ、485棟の家屋と5人の焼死犠牲者を出した。1年生の下校後とか夜間の火事だったならもっと多くの犠牲者が出たのではと後に語られた。

日没前に、駅の車庫庫に避難していた曾祖父たちも一緒になり、汽車に乗って隣の駅まで行き、バスで赤倉温泉の親戚「三之丞旅館」に家族全員が避難できた。

火災時の煙や灰は、風に乗って宮城県の遥か遠くまで飛んで流れていった。一早く通信機器や救援物資を積んで到着したのは、仙台逓信局（現・東北郵政局）の赤トラック（当時は消防関係と逓信省管轄だけが赤色の使用が認められていた）3台だった

というが、戦時の状況から通信網重視による措置と思われる。街道を完全貫通した火災は、トラックの近付くことさえ拒んだ。

強風に煽られた火勢は、二つの集落を包み込むのに 30 分も要しなかったというから、どの罹災者も命からがら避難するのがやっとで、家財道具など持ち出す暇がなかったのは、今回の大地震や津波と同様である。『泥棒は家までは持っていかないが、津波や火事は根こそぎ持っていく』の譬え通りであった。焼け残ったのは火元より風上の 30 軒ばかりの民家と山手にあった本城集落、それに羽前向町駅、専売局「たばこ集納所」、室町時代から続く馬生産の拠点「馬産協同組合」の厩舎施設だけで、何れも火勢から離れた場所にあったせいからだった。

翌日の新聞は、大見出しで全国にこの大火を報じた。何年も過ぎてから見た記事の中に、「火災保険は飛鳥恵助（私の祖父）の 5 千円が最高額で、他は小額か加入していない者の方が多かった」とあった。その当時でも 5 千円で家は建たないとしても、我が家にすれば大いに助かったに相違ない。

どの家でも貴重な財産を根こそぎ失ったが、親たちの後日談では「日本外史」を書いた歴史家で文人の頼山陽（1781～1832）直筆の漢詩掛軸、室町後期の刀工・関の孫六兼元作の刀などで、真贋の程は別としても惜しんでいた。

翌 18 日、アメリカ空母から飛び立った爆撃機による初の東京空襲（ドーリットル中佐の指揮から「ドーリットル空襲」という）があった。開戦 4 か月にして本土空襲となり、その時既に本土に危機が迫っていたのである。

### 3 大火後の生活

幼少の私が残念に思ったのは、仏間の隅に小さな学習机を置いてもらい、その引き出しに残した 12 色の色鉛筆で、思い出すと涙がこぼれた最も貴重な品だった。

焼け出された人々は「着の身着のまま」で、頼るのは親戚や知り合いの好意だけであった。我が家では曾祖父母を「三之丞旅館」に残し、公職を持つ祖父と父、私たちは風上で焼け残った「松井三蔵」宅という遠縁を頼りに移り住むことができたが、罹災者は村内外散り散りに一時離散したこと間違いない。身を寄せる当てがない家では、「馬産組合」に馬市で年に 1 度だけ仔馬と飼い主が最後の別れをする場所に使う、囲いもない 1 坪半程の 100 箇所ほどあった厩舎に移り住んでいた。村役場、営林署、郵便局などの公共施設も「馬産組合」に仮事務所を置いた。

火災の跡は、1 週間を過ぎても掘り起こせば燻り、特に土蔵の焼け壁土は何日経っても中は火の塊で、独特の異臭が鼻を突いた。

当時としては大火災であったため、全国から多くの救援物資の支援を受けた。幼少の私は詳しく分からないが、生活物資は配給制でも毛布や衣類など、食品では春季の

生鯿が箱詰で沢山配給され、屋外で焼く鯿は今の冷凍物と違い大振りで脂が乗っていてたまらないご馳走だった。親類縁者の多くが次々と見舞いを持参して訪れていた。

大火から1週間を過ぎ「たばこ集納所」を学校の代わりとして、近辺の学校から机と椅子を借り受け、仕切もなしに3部制で授業が始まった。

罹災者の人たちは遅しく、焦土と化した土地の片付けに取り掛かった。我が家では、持ち山の木を伐採することから始まり、次いで30坪ばかりの仮小屋建築に着手し、2か月も掛らないで完成し6月中旬に移り住むことできた。その時、「三之丞旅館」も「松井家」も提供した食材費を含め、代償は全く要らないと申し出てくれた。不自由なく養われ有り難く思う気持と同時に恐縮したと思う。親に言われたのは、『両家の恩義は生涯忘れてならない』であった。

7月7日、この仮小屋で曾祖父が77歳で死亡し、これが身内葬儀における最初の記憶となった。

その後、母屋と郵便局の建設に取り掛かろうとする時、大工は軍需産業関連で徴用動員されており不足、建築資材は釘やガラスを含め全てが物資不足の時代に入っていたのである。木材は母の実家など親戚からの援助と伐採の木で自前としても、親たちは苦労を重ねて何とか年内10月末には郵便局を竣工させ、総工費1万8千円。母屋は11月後半に完成して仮小屋から移り、総工費は2万5千円だと聞いた。これは自前の木材を使っただけの金額である。

学校の建設は始まったが、向町集落は約60年に1度大きな火災に見舞われた過去があったため離れて選地された。6月頃の建設着手と同時に、「ハケゴ」(藁製の腰に下げる物入れ)持参を指示されたが罹災家庭にはないため、親が農家に頼んで調達してきて持たされ、授業後は近くを流れる清流絹出川から学校の土台を作るための砂運びが日課となった。上級生はもっと難儀な仕事の手伝いに動員されたように思う。

学校の一部「体操場」(体育館)が完成したのは、翌年4月で2年生になる新学期で、この体操場を10区分程に仕切をして職員室と教室にしたがやはり2部制授業で、午前か午後は砂利運びなどの建設支援で、教科書は半分も進まずに各学期は終わるのが常態であった。

#### 4 戦時中の学校と生活

戦局は次第に厳しくなり、奥羽山脈のまっただ中にある田舎村も影響が出始めた。しかし、報道される「大本営発表」は連戦連勝で、特に『我が軍の損害は微小なり』が続き、実態は伝わらなかった。

父は郵便局長として通信確保責任者の立場から招集を免れたが、大阪府警察官の力雄は北支那方面に、徴用中の叔父恵四郎は南方方面へと出征した。出征前は親類縁者



が集まって送別の宴を開くが、酒も魚も肉も少ないため川の一部を塞ぎ止める「川干し」で鯿や鮠などを捕り、川原で味噌仕立ての大鍋をご馳走として少しの酒で送り出していた。「歓呼の聲に送られて」と言うが、決死の覚悟の門出は悲しく淋しいもの、惨めな感じさえ拭えきれなかった。ましてや、親ともなれば。

都会からの疎開が始まった。最初は親類が頼ってくる程度で、出征後の母子家庭などだったが、次第に子どもたちだけを縁者に疎開させる場合もあったりして、学級の人数は増えてきた。

移り住んできた疎開児童は、紺の半ズボンに白いシャツの男子、スカートに色物のブラウスなどの女子、学習も比較にならないほど進んでおり、白くきめの細かい肌色の生徒たちに、先ず田舎者たちは大きなカルチャーショックを受けた。

特に大火で罹災した家は「お下がり」（年長者の着古しを再利用）がないから着替える物がなく、購入したいにも店には衣類を売るところもない時代である。それに皆が継ぎ接ぎだらけ服装で衛生状態も良くないため、ことごとく見劣りしたように思う。砂利や薪運び作業で授業もろくに行われなかった時期が長かった子たち、憧れのぎこちなさからくる小さな意地悪はあったかもしれないが、苛めなどの話は聞かなかった。

昭和 19 年春、我が家にも私から 3 代も前の分家が広島市から母と子ども 3 人が越して、2 階に住むことになった。この家族は既に大学生の長男を東京空襲で亡くしていた。独り子の私は、1 歳上の男の子と気が合って格好の遊び相手であった。

この村にも物資食糧の不足は次第に迫ってくるが、当時は農家以外も屋敷内に畑を持つ家が多く、山菜も豊富な地域では何とか腹を凌ぐ程度のことは可能だった。開戦と同時に無くなったのは菓子などの甘い物で、肉は全く食膳から消え（山鳥や野兎は偶に貰って食べた）少量の魚も塩蔵か干物に変わり、『ほしがりません、勝つまでは』のスローガンの元に誰も不平不満を言わなかった。食事が十分でないため、みんな痩せ細っていた。

ところが、昭和 19 年秋過ぎから強制学童疎開が始まり事情は一変した。村内の寺院や温泉旅館などへ配置されるまではよかったが、未だ疎開を受け入れていない家庭に対し強制的に割り当てられ、各学校は 3 倍を超す人数に膨れ上がった。引率してくる先生の中には校長クラスの人もいたので、多分学校は既に焼失していたものと思われる。

男性先生のほとんどに召集令状が届き、村内の女学校卒業者が代わって教壇に立つようになり、出征した力雄の妻恒子（母の妹でもあった）もその一人として務め、教員として非凡な才能を発揮し私の誇りであった。

鉄の町釜石市への艦砲射撃の着弾音が遠くかすかに届き、仙台港への攻撃ははっきり腹に響いて聞えた。山村にもグラマン戦闘機が頻繁に飛来するようになったのは、真

室川村にあった陸軍の飛行場を爆撃するため、「空襲警報発令」のサイレンで何となしに2階に上ると、直後に低空で飛行する飛行機が通過し、瞬時防空メガネを懸けたアメリカ兵の顔を目撃し、動揺して階段を転げ落ち押し入れに掛け込んだ。寒村には爆弾投下も機銃掃射もなかった。

その頃、56歳の祖父に召集令状が届き、現役招集の最高齢者だという。新庄町（現・新庄市）に第3396部隊が設置され部隊長を拝命とのこと。

隊員は何れも退役軍人の老兵総勢6名で、祖父は軍刀を下げて毎朝汽車通勤していた。「さんざん苦勞する」部隊とゴロ合わせで言われていたが、本土決戦に備えた措置の一つだったと思う。

至るところに防空壕が掘られ、学童は防空頭巾（綿を入れた頭から肩を覆う布製の被り物）を被り、サイレンが鳴ると登校途中でも近くの山に逃げ込んだ。大人たち（若い人は兵役で年配者）は松の根を掘り、絞った油を飛行機の潤滑油に使うためにと動員されていた。こんな時期、叔父恵四郎がフィリピンで戦死したと通知が入るが、祖父も祖母も人前では涙一つ見せなかった。届いたのは入隊時に切った爪だった。

仙台の師団から50名ばかりの兵士が我が村に移行してきたのもその頃で、一種の兵団の疎開だったと思う。その兵たちは、原野を耕して馬鈴薯や大根を植えていた。祖父の地位から、酒が飲めるのではと我が家に来る士官たちもいた。

昭和20年8月6日広島に、8月9日長崎にB29爆撃機による原爆投下があった。新聞は「新型爆弾」による空襲と書いてあった。我が家に疎開している親戚の主人は内務省（当時）の役員で、単身広島に残っていた。案じていた家族に翌々日広島から離れていて無事だったと一報が入り安堵していた。



15日水曜日、正午から天皇陛下の放送があるとのことで、学校は休みと知らせがあった。ラジオのある家は少なく、しかも雑音の混じる玉音放送を家族とともに聴いた。言葉は難しくて分からなかったが、昭和天皇陛下の厳かに語り掛けるような口調を思い出す。大人たちから『戦争は負けたのだ』と聞かされ、占領されるの



来襲したグラマン戦闘機



B29 爆撃機

昭和天皇 で命はないかもしれないとの囁きは、強烈に現実味を帯びていた。その後、隣にある郵便局の事務室で局員たちの会話聞くとともに、床に直に坐り膝小僧を抱えていた自分の姿を思い出す。

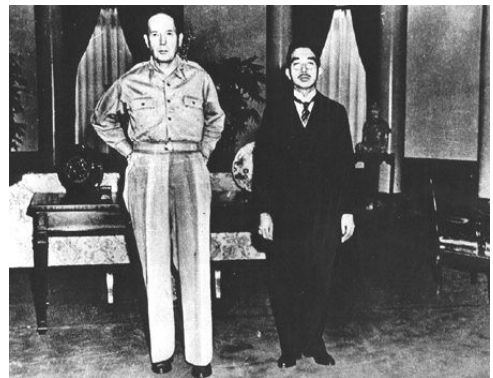
## 5 戦後のことなど

衣食住、特に食糧事情は戦後の方が一層厳しかったように思う。親たちは食べた素振りをして子どもに食を与えた。戦時中の「糲飯」(かてめし)を超えて、米のない日も頻繁にあったし、少量の米に食べられる物は何でも入れて食べた。一番上等に思ったのは大根の葉を干した混ぜ物で、少し塩を入れれば食べ易くなった。美味しい山菜が豊富な土地柄と、戦時中に耕せるところは全て食料を植えていたため、混ぜられる植物はあった。南瓜やさつまいも、馬鈴薯、豆類、南瓜などは主食同然で、山からは蕨やワラビ、ワラビの根、ゼンマイ、山芋など、畑から南瓜やさつまいもの茎、大根など、野草もアカザの実など煮物にして美味しかったし、川魚は貴重な蛋白源だった。蕨はよかったが食べ難かったのは大根飯で、見た目は白く美味しそうだったが湯気とともに鼻につく臭いに噁せかえった。味付けはほとんど塩だけで、味噌は大火のせいで醸成が進まない塩辛いものを使い、醤油は貴重品だった。

こんな時に、旧軍隊の備蓄保有品が各戸人数割で配給になり、他にもあったと思うが食品で記憶に残っているのは「鮭缶」だった。我が家にも150個ほど配給され、こんな美味しい味に初めて出会ったことと、鉄類は全て供出させられたので空き缶の鉄は勿体ないと思ったことである。

9月27日、天皇は連合軍最高司令官のマッカーサー元帥とアメリカ大使館公邸で会見された。

正装した天皇に比較して元帥の服装もさることながら、国民はこの1枚の写真から敗戦の現実を身をもって悟ったといわれる。天皇は、『我が身はいか様になろうとも、国民の安全を願いたい』と



切々と訴えたという。

間もなく進駐軍は小さな村にもやってきた。 **昭和天皇とマッカーサー元帥の会見**

始めて見る米兵たちの姿に、寄るでもない離れるでもなく童たちは遠巻きに立ち、近寄る彼らからガムやチョコレートを怖々と貰ったが、私はどんな味だったのか記憶にない。その後出回った味と同じだったせいかもしれない。「敵軍が進駐すれば殺される」はなかったのである。

彼らと話せる人がこの村にもいた。それは著名な女医・門脇シズエさんの御主人で東京外語専門学校(現・東京外語大学)出身、元東京の商社マンで薬剤師の資格も持

つ方で、近所で幼馴染の漫談家で俳優のケーシー高峰氏（本名・門脇貞男。1934～）の父上である。

疎開学童は次第に村を離れるが、戦争孤児になった者も少なくないはずで、名前さえ覚えていなかった彼らは、その後どのような人生を辿ったか分りようもない。我が家に疎開していた親戚家族も、年末には埼玉県に居を探すと離れていった。

祖父は公職追放で恩給は没収され、父はそのままだったが家業の呉服商は再開できなかった。ほどなく戦争や武士道に関する全てが教科書から破られ墨で黒塗りにされ、武器刀剣の没収、剣道用具などの破壊が行われ、翌々年には農地解放による地主解体が実施された。

次々と生き残った出征兵士の復員が始まり、軍服に大きなリュックサックを背負い生還してきた。痩せこけていたが生死を懸けて戦ってきた人たちの目は底光りして威勢がよく、生きて帰れた喜びに満ちていた。彼らの中で若年の者は青年団を結成し、新生日本の旗頭となるべく歩を進め、仮掛け舞台で村芝居などを始めた。招集されていた先生方も帰ってきたが、元気がよすぎ訳もなく殴るので怖かった。

翌年春に叔父の力雄は帰還したが、前年11月に妻の恒子は急死していた。

学制改革は、GHQ指導のもとに終戦の翌年から始まり、私たちの同級生は23年に新制中学校入学となった。ようやく弁当にご飯を入れて持てるようになるのは中学2年生の頃からと思うが、おかずの中身は粗末なものだった。独り息子だった私は、特有の弱点を沢山持っていることに気付いたのはその頃で、それまで勉強も運動も駄目だった自分を克服しようと思いついたのが幸いし、やる気を起こして行動すれば必ず達成できると確信するに至り、一気に変身して喜びを味わうことできた。

中学3年生の秋、友人と二人が担任の先生に誘われ新庄に行った時、駅前でラーメンをご馳走になった。こんな美味しい麺があったんだとつくづくと思った。カツ丼で動揺する思いをするのは更に1年半後まで待たなければならなかった。

高校入学の年、学生服も生地が弱くて粗末で肘、膝、尻は破れやすく、ほとんどの生徒が補修の布を当てていた。各家庭にパンの購入票が数枚配られた。購入できるのは新庄の店1軒だけで、列に並び10円で買ったのはコッペパン数個であった。それから半年を過ぎた頃、駅の売店には餡パンやアイスクリームが出始めたから、急速に改善の方向に進みつつあったのだろう。

## 終わりに

「民主主義」が時代を象徴する言葉となり、それまでの抑圧から解放され、自由を謳歌する風潮に溢れた。しかし、この自由は随所にGHQの押し付けによるとの印象が強く、それは今に至り払拭されていないと部分もある。

それにしても、我が国の戦後復興は早かった。昭和 25 年 6 月から 2 年間余り続いた朝鮮戦争も、経済界に及ぼした影響は皆無と言えないところがある。



私  
は  
米  
国  
の  
ワ  
シ  
ン



ントンDCの合衆国連邦国会議事堂（愛称・キャピトル・ヒル）近く

#### 合衆国連邦国会議事堂

#### 朝鮮戦争メモリアルパークの兵士彫像

にある、「朝鮮戦争メモリアルパーク」で兵士たちの彫像群を見た。道を隔てた反対側には、同様に「ベトナム戦争メモリアルパーク」があった。実に生々しいく実戦さながらに兵士像の配置であり、戦死者の氏名と人数まで明記されている。我が国ならこのような記念公園は決して作らないだろうと思う。

朝鮮戦争後の経済界は、「神武景気」、「岩戸景気」、「いざなぎ景気」と続き、建築ラッシュと地価の高騰を招き、更に田中角栄の「列島改造論」に至る。反面、第一次～三次の「オイルショック」、「バブル景気」と「バブル崩壊」と続いてきた。平成 7 年 (1995) は大変な年で、阪神大震災とオウム真理教地下鉄サリン事件があった。

今回の大震災では、被災地ばかりでない多くの地区で瞬時にライフラインはストップし、緊急避難に関連する物品は売り切れ、ガソリンも灯油も途絶えた。加えて福島第 1 原子力発電所の爆発事故である。

自然の猛威は侮れない天災となって、戦争などは人災として人命や財産を奪い去る。文明の利器と思われていた原子力発電所は、最大級の危険レベルに達しそうに経過しながらも、真実はベールに閉ざされたまま。人災の最たると事変にならなければと祈り願

うばかりである。いくら頑張ってみても、避難住民支援以外は手助けできない力の弱さと限界を感じる。

今回、大火に遭った災害と戦争を取り上げて語ったが、戦後 66 年を経て暮らし易く平穏な生活に慣れ過ぎた私たちは、大震災から何を学び何を模索すべきなのか。被災者支援の行動と併せ、国を挙げて真剣に考なければならない課題である。

『日本人は、第二次世界大戦（太平洋戦争）の勃発と敗戦をきっちりと総括していない』、『日本人には基本がない』は、ジョン・トーランド著の「大日本帝国の興亡①」

（毎日新聞社訳。1971 年刊行）にある言葉である。この書が出回った後、反論もこれに触発された書物も見当たらないのは、誠に残念と言わざるを得ない。

おわり